

飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

令和3年7月25日現在

今月の重点活動

■指導農業士 経営能力の向上と岐阜県農政部長との意見交換～夏季経営研修会～

県は地域農業の振興、農村青少年の育成等を図るため、高度な技術及び経営能力を有する農業者（担い手リーダー）を指導農業士に認定している。現在、飛騨地域では20名が認定されている。

7月13日、飛騨管内で「夏季経営研修会」（指導農業士会飛騨支部主催）を開催し、岐阜県農政部長をはじめ、指導農業士及び関係機関計30名が出席した。

第1部の現地視察では、R元年度に指導農業士に認定された3名（施設野菜2、肉用牛1）が各自の農場で経営概要を説明し、参加者からの様々な質問、意見交換を通じて、今後の農業経営にかかる情報共有が図られた。

第2部の室内研修では、長尾 県農政部長より「岐阜県における農業振興について」と題して、ぎふ農業・農村基本計画を中心としたWEB講演があり、飛騨地域の農業の課題解決に向けた意見交換を行った。

農業普及課では、今後も指導農業士活動の支援を行い、経営能力の向上や組織強化による産地の維持・発展及び新規担い手の育成を図っていく。



【農政部長によるWEB講演】

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■担い手 次年度新規就農者に対する就農計画作成支援

高山市では令和4年3月の就農を目指す若者が、指導農業士等の元で研修を行っている。農業普及課では、実践的な研修と並行して、支援機関（ぎふアグリチャレンジ支援センター、市、JA）と連携し青年等就農計画の作成支援を行っている。

6月25日に研修生2名に対して第1回の面談を行い、就農計画を作成する意義、経営収支やキャッシュフローの考え方等の基本事項を説明した。今後は、研修生と定期的に面談を実施しながら、経営規模や営農に必要な資材・機械等の詳細な部分を積み上げ、12月頃の完成を目指す。

農業普及課では、自主性を尊重した就農計画の作成と、確実な計画の達成に向け栽培技術、経営管理能力を習得できるように継続して支援を行っている。



【面談の様子】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■山ぶどう 「飛騨山ぶどう研究会」現地研修を開催

飛騨の山ぶどうは、もともと山に自生していたものを収穫しやすいように畑に棚を作り栽培を始めた。平成元年に「飛騨山ぶどう研究会」を発足し、現在は7名の会員が栽培を行っている。

7月20日、「飛騨山ぶどう研究会」で現地研修が行われた。当日は、研究会員とJA、中山間農業研究所、農業普及課で生産者6名のは場巡回を行い、今年の生育状況と着果量の確認を行った。

今年は、病害虫の発生はほとんど見られず、着果も安定しており、収穫量は昨年並みからやや多い見込みである。

山ぶどうは主にジュースやジャムに加工して販売される。農業普及課では高品質な山ぶどうが収穫できるよう、今後も継続して病害虫防除の呼びかけを行っている。



【生育と着果量の確認】

■飛騨市水稻生産者 第2回美味しいお米養生講座を開催

飛騨市は4月に開催した第1回に引き続き「第2回美味しいお米養成講座」を開催した。今回は従来の水稻青空教室と兼ねて開催され、6月26日の古川町内4カ所を皮切りに、7月1日の宮川町内6カ所、2日の神岡町内9カ所、3日の河合町内2カ所と各町で数カ所に分散して行われた。

農業普及課では、JAひだとともに講師を務め、美味しいお米づくりのポイントを交えながら今後の栽培管理について講演を行った。「美味しいお米養成講座」は、11月に第3回が予定されており、これまでと同様に飛騨米の食味の向上につながるよう支援を継続していく。



【古川町での講演】

■夏秋トマト 本格的な出荷時期を迎えて各地区で出荷基準目揃え会を開催

飛騨蔬菜出荷組合トマト部会では、本格的な出荷を前に出荷規格の目合わせを確実に行うため、7月上～中旬にかけ各地区で目揃え会が開催された。本年度は梅雨入りが早く、生育初期の根張りを確保する時期に日照量が少なかったことや地温が確保出来なかったこと等を原因とし、出荷開始が遅れた生産者が多く、出荷量が前年のペースを下回っているが、天候の回復や栽培管理により、今後は前年並の出荷量が期待される。

農業普及課では、病害予防、灌水管理などを中心に情報提供し、今後の安定した作柄の確保に向けた支援を実施した。



【栽培管理の徹底の呼び掛け】

■夏秋トマト データ駆動 あぐりログ設置および灰色かび病発生調査

農業普及課では、令和3年度よりデータ駆動型農業の実践・展開支援事業を活用し、農業技術センターと協力し、ハウス内環境モニタリング装置により、温湿度データに基づく灰色かび病の発生予測に取り組んでいる。

7月にモニタリング装置を設置した調査協力農家ハウスにて灰色かび病の発生調査を行った。

本年度は事業初年度にあたり、温湿度データと灰色かび病発生がどの程度連動するか検証する。



【灰色かび病発生調査】

■夏秋トマト データ駆動型農業の実証試験に向けて

夏秋トマト栽培では、秋季に雨よけハウスの開放部を被覆し保温することによってトマトの色づきを促進している。

しかし、被覆により湿度が高まることによって果実の結露が発生しやすくなり、果実の病害や汚れの発生による品質低下の原因となっている。

管内では、生産者団体（飛騨夏秋トマトスマート農業協議会）が「データ駆動型農業の実践体制づくり支援事業」を活用してこの課題解決に取り組んでおり、参加生産者のうち8戸がハウス内湿度を制御するための被覆用サイドビニルの自動巻き上げ機を導入する予定である。

農業普及課では、果実の結露を軽減できる被覆用サイドビニルの効果的な運用方法を確立するため、模擬果実温センサを用いて結露発生の実態を把握するとともに、生産者のハウス内環境モニタリングデータと合わせて分析を行うこととしている。



【模擬果実温センサを設置して果実温度を測定】

■夏秋トマト 吉城トマト研究会 マルハナバチ現地研修会

吉城トマト研究会は、吉城地域の若手トマト生産者を中心に結成されており、栽培試験の実施や勉強会の開催などの活動を通じて生産技術の向上や仲間づくりを行っている。

7月2日、マルハナバチの現地研修会が開催され、研究会員12名が出席した。マルハナバチはトマトの受粉媒介に用いられ、労力の大きいホルモン処理に替わり、着果処理の省力化が可能となる。吉城地区ではマルハナバチがほとんど導入されていなかったが、昨年度から研究会員を中心に普及しつつあることから現地研修会を開催した。

当日は、マルハナバチメーカーから使用方法などについての説明やハチの活動状況の確認が行われたほか、農業普及課からは効率的な活動を確保するための巣箱設置事例を紹介した。

今後は初めて導入する生産者を中心にフォローアップを行い、マルハナバチがさらに普及するよう支援を行っていく。



【マルハナバチメーカーの説明を熱心に聞く研究会員達】

■ほうれんそう 農作業分業化プロジェクト（土壌消毒）

飛騨地域のほうれんそうは高齢化等により、年々農業者数が減少し、出荷量が減少傾向にある。平成29年に飛騨蔬菜出荷組合ほうれんそう部会が実施したアンケート調査によると、全体の約4割が、ハウスビニール張りや土壌消毒、出荷調製作業等、負担の大きな作業があるため、経営継続又は拡大が困難と回答している。

そこで、ほうれんそうに係る一部作業を分業化することで、負担軽減を図り、作付拡大を促すことを目的に、夏ほうれんそうの栽培には欠かすことのできない土壌消毒作業を高山市内の事業者へ委託し、7月1日と6日に高山市内の農業者2名のほ場において、現地実証を行った。

作業時間は各ほ場1ハウスあたり98分と120分を要し、ハウスの大きさによりばらつきがあった。また、事前に個々の農業者が施肥・耕起作業までは終了した段階で、土壌消毒作業と被覆のみを行うことにより、ほぼ計画通りに作業を終了することができた。

農業普及課では、今回の実証における課題や改善点を検討するとともに、飛騨地域のほうれんそう産地の維持・拡大のために引き続き支援していく。



【土壌消毒作業の様子】

■ほうれんそう 目揃え会を開催。出荷時の注意事項を改めて確認。

7月2日より、各地区のほうれんそう部会の出荷目揃え会が順次開催された。

目揃え会では出荷規格の確認と出荷物の品質向上に向けた注意喚起が行われた。農業普及課からは、この時期発生が増加する葉の腐り対策や害虫対策、高温時の栽培のポイントについて説明した。

栽培の難しい夏季にはいるため、農業普及課では今後も高品質なほうれんそう生産に向けた支援を行っていく。



【品質向上のため気を引き締める】

■ほうれんそう ほうれんそう品評会を開催（高山南）

7月19日、高山南ほうれんそう部会において、品質が低下しやすい時期の品質向上を目的にほうれんそう品評会が開催された。部会役員をはじめ、JAひだ、全農岐阜、農業普及課の関係機関が審査員となり、出荷規格や荷姿、選別・調製、葉色等を5段階で評価した。

出品者は16名で、梅雨時期の日照不足で品質低下が心配されたが、どれも品質が良く、高い評価となった。点数の高かった上位5名は12月の反省会の際に表彰される予定である。

農業普及課では、引き続きほうれんそう生産者が品質の良いほうれんそうを安定出荷できるよう、関係機関と連携して支援していく。



【出品されたほうれんそうを審査する審査員】

■花卉 トルコキキョウ目揃え会

7月1日に、JAひだ管内でトルコキキョウ目揃え会が開催された。当日は、全農の担当者から早い梅雨入りで品質が低下している等、他産地の生育状況や個人消費の増加等、販売状況の情報提供がされた。農業普及課からは今後の栽培管理の注意点について、中山間農業研究所からは今年度の試験内容について説明した。その後、花芽の残し方等の出荷調整方法の実演が行われ、生産者は熱心に説明を聞いていた。

室内検討後、ほ場に移動し、生育状況を確認した。

農業普及課では、JAひだ営農指導員と連携し、トルコキキョウの生産を支援していく。



【目揃え会風景】